

<エッセイ> いのちの未来 Future of Life

石黒浩^{*†}

Hiroshi Ishiguro

大阪・関西万博において、テーマ事業プロデューサーとして、「いのちの未来」パビリオンを建築する機会を得た。本稿ではパビリオンで何を表現しようとしているかを説明する。

大阪では、50 年前に万博史上大成功を収めた大阪万博が開催された。その大阪で再び万博が開催されている。再び万博を開催することの意味はどこにあるのだろうか。大阪・関西万博のプロデューサーのオファーを受けた際に、真っ先にそのことが頭をよぎり、半年ほど悩んだ。

従来万博では、最先端の技術が展示され、その技術が人々に夢を与えてきた。例えば、50 年前の大阪万博では、リニアモーターカーの模型や、携帯電話の原型が展示された。そうした未来の技術を展示し、技術で豊かになる未来を見せるのが万博であった。

しかし、現代はどうかというと、技術の進展、特に AI やロボットの技術進歩がめざましく、毎週のように新しい技術のニュースが飛び交っている。たとえ、最先端の技術を万博に展示したとしても、万博の6ヶ月間の展示期間の間に、それらの技術は陳腐化し、世の中ではもっと進んだ技術が利用されることになる。

故に、万博はもはや最新の技術を展示する場ではない。ならば、万博を開催する意味はどこにあるのだろうか。私の答えは、万博は未来を考える場であるということである。

50 年前の大阪万博では、世界中の人々は技術で豊かになることを目指していた。人類の未来や地球の未来を考えることよりも、精一杯生きて豊かになることを考えていたのである。しかし、50 年経った今、我々人間は、人間を設計できる遺伝子の技術や、地球環境を守ることにも破壊することもできるエネルギーの力を手に入れた。すなわち、我々人間には、人類の未来や地球環境の未来を考える責任がある。

この人間の責任を果たす場が、新たな万博である。世界中の人々が同じ場所に集まり、人類の未来、地球の未来を考え、その考えたことをレガシーとして残す。これこそが新たに大阪・関西万博を開催することの意味だと思う。

このような思いを、関西を中心とする様々な企業に伝えた。その結果、多くの企業がパビリオンへの協賛を決めてくれた。そして、そうして集まった協賛企業と共に、この3年間、パビリオンを作り上げてきた。

パビリオンの製作において重視したのは、協賛企業も交えて、未来と一緒に考え、それを展示に反映させるということであった。共創ミーティングと呼ぶ議論の場を立ち上げ、2週間に1度のペースで、様々な協賛企業と未来の技術やそれによって実現される未来のプロダクトについ

* 大阪大学基礎工学研究科

† ATR 石黒浩特別研究所

て議論を交わした。

そうしてできあがったのが、「いのちの未来」パビリオンである。共創ミーティングでの議論の上に、様々なクリエイター アイデアを積み重ね、他のパビリオンには見られない未来を考えるための展示を完成させることができた。その詳細は、図1の日経BP社から出版されている『いのちの未来 2075 人間はロボットになり、ロボットは人間になる』に詳細に記載されている[‡]。



図1. 書籍『いのちの未来 2075 人間はロボットになり、ロボットは人間になる』表紙
(著作権者より許諾を得て引用)

パビリオンは3つのゾーンから構成されている。ゾーン1(図2)は導入のゾーンで、日本においていのちを宿してきた様々な人型の歴史を展示している。土偶や埴輪から始まり、仏像、能面、文楽人形からアンドロイドに至る。この中でも、埴輪と仏像はかつての大阪万博でも展示されたものである。

[‡] 石黒浩. (2025). いのちの未来 2075 人間はロボットになり、ロボットは人間になる. 日本経済新聞出版



図 2. ゾーン 1 (©FUTURE OF LIFE/EXPO 2025)

ゾーン 2 は、パビリオンのメインの展示エリアで、50 年後の未来の生活の場が展示されている。そして、そこで生活する仲の良い祖母と孫のストーリーが展開される。そのストーリーの中で祖母は、自然に死を迎えるか、記憶をアンドロイドに引き継いでいくかという選択に悩む。既に多くの来館者にこの展示を見てもらっているが、ほとんどの来館者が未来について深く考えさせられたという感想を述べている。以下に、ゾーン 2 を構成する 6 つの部屋の画像を示す（図 3）。





図3. ゾーン2 (©FUTURE OF LIFE/EXPO 2025)

このゾーン2の様々なシーンの中には、図4の協賛企業が考えた50年後の未来の製品がちりばめられている。これらの技術は50年後に可能になると想像される技術を基に、共創ミーティングでの議論を基に、各協賛企業が考えたものである。ゾーン2では、祖母と孫がこれら



図4. 50年後の未来の製品 (©FUTURE OF LIFE/EXPO 2025)

最後のゾーン3では1000年後の人間に出会う。1000年後、人間は精神体になり、体の制約から解放され自由に体を選べるようになる。しかし一方で、より深く人と繋がり互いに深い心を感じるようになる。そうしたコンセプトのもとに、アーティスト達にデザインしてもらった未来の人間である。

50年前の大阪万博では、様々な科学技術が展示される会場の真ん中に、いのちの爆発を表現した太陽の塔が建設された。その太陽の塔の中には、原生動物から人間に至る進化の木が造られている。このゾーン3はそれにならって、さらに科学技術で進化する1000年後の人間を表現したものである(図5)。



図 5. ゾーン 3 (©FUTURE OF LIFE/EXPO 2025)

是非、大阪・関西万博と「いのちの未来」パビリオンに来場いただき、未来について考えていただきたい。

